様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４４２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１８９

研究課題名（和文）演劇的現実体験を通じた実生活上の意識変容に関する深層心理的研究

研究課題名（英文）Depthpsychological study about the reformation of consciousness in real life thorough theatrical reality-experiences

研究代表者
猪股　剛（Inomata, Tsuyoshi）

帝塚山学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：９０３６１３８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究が明らかにしたものは、その変容体験そのものは「かすかな移行」であり、存在の根本的な変容や思考の根本的な発展などではないということである。カタルシス体験のような一瞬の高揚は現実を大きく変更したように体験されるが、一方でその内実は発散的な作用にとどまる。しかし、ここで明らかになった変容体験は、高揚は伴わず、何かが大きく変わったとの自意識も生み出さない。それでいてその体験を経ることによって、客観的にはその体験者の生活が変わり、症状は消えはしないものの、もはや苦しい異物ではなく、その者自身の個性のようになる。そのような「かすかな移行」体験が、変容体験の本質であることが本研究から明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study examines the reformation of consciousness, based on comparison between theatrical experiences and clinical psychotherapy. The issue of psychotherapeutic and theatrical transformation is neither an elimination of symptoms nor a metamorphosis to a completely new life nor catharsis. In the psychotherapy and theater the basis of existence continues always unchanged, but the door to another mode of existence opens. The depth psychological psychotherapy connects the old mode to the new modes of existence with an invisible umbilical code (vinculum). Through this code we get the possibility to the diversity of existence. The subtle transition to the diversity of existence we can call transformation of psychotherapy. From the life, dreams and sandplay of the epileptic adolescent the psychotherapeutic contradictory abundant coniunctio is revealed.

研究分野：臨床心理学、演劇学

キーワード：現実性　変容体験　かすかな移行　心理療法的変容　演劇的現実　舞台芸術

１．研究開始当初の背景

従来の演劇と心理学の先行研究は「カタルシス論」と「心理劇の研究」に偏っていた。演劇研究における心理分析は古典的な精神分析を演劇研究者が援用したものが多く、多くは抑圧とその解放とカタルシスという定式の外には出ていなかった。また逆に、心理学者が演劇研究を行う場合には、グループワークで心理劇を実践しグループ体験に演劇理論を援用する古典的な劇作論に基づくものが多かった。

しかし、ポストドラマ理論を展開したドイツの演劇学者 H.T.レーマンの研究や、ユング心理学や対象関係論などの心理療法の現実体験における多様性の研究を鑑みれば、この両分野の実践的かつ理論的交流に基づいた研究が立ち遅れており、本来的な交流研究が欠けていたのは明らかであった。両分野を視野に入れた研究は、わずかに医療人類学や民俗学的な儀礼分析に取り上げられているだけであった。

そもそも演劇の本質は、舞台上に仮想の現実を再現することにあるわけではない。演劇は、現実を再提示するためのメディアではなく、むしろ現実を〈本来の現実の強度〉を持って体験する枠組みの提案であり、現実を体験するための方法論であり、その実践である。そのため、現実の再現性を職人的に高めた役者中心の舞台芸術から、どのような素人でも演出次第によって演劇的現実を構成できるという演出中心的な舞台芸術へと現代の趨勢が変化してきている。

また、深層心理学を中心とした臨床心理学では、当初自我に対して侵入的である無意識からの欲望を自我がどのように統合しコントロールするのかが課題とされた。演劇との関連で言えば、欲望を仮想現実の中で昇華させ、昇華という防衛機能によって観客にカタルシスがもたらされることにより、過度のストレスや過度の欲望が発散され、自我のまとまりを高めていくという理解があてはめられた。しかし、深層心理学の研究が進むに連れ、自我の強化が根本的なテーマではなくなり、むしろ科学的で客観的な現実社会を生きると共に、それとは一致しない心的現実をいかに自分の現実としてとらえ、しかもそれらを解離させてしまうことなく生きることができるのかが心理学の課題となってきている。すなわち、欲望を昇華させたり抑圧したりせず、多様な現実を多様なままに捕らえ、その多様な現実体験が成立するための心理的な基盤ができていくことが治療的だと考えられるようになったと言える。

そのような演劇と心理学の現代の課題を現実体験とその変容に注目して実践的かつ理論的研究していくことが必要とされた。

２．研究の目的

研究の目的は、第一に演劇的な現実体験を通じて、人々の現実意識がどのように変容するのかを深層心理学的な観点から研究すると共に、演劇的な芸術体験と心理臨床における治療体験が、現実意識と現実体験の変容という観点において酷似していることを明らかにし、この現実体験の方法論を抽出することにある。第二に、その現実体験の変容が心理治療に有益であることを確認しつつ、その方法論を洗練し、演劇体験や心理療法体験がカタルシス的な発散ではなく、〈現実体験とその変容〉という面においてこそ有用であることを示す。結果として、現実体験に多層性をもたらす舞台芸術の心理治療的側面と、心理臨床の芸術的な側面を相互に明らかに、その両分野に対して相互発展の提言し、現実体験様式の新たな発信することを目的としている。

３．研究の方法

本研究は三年計画で実行された。初年度は、演劇体験の調査を主とし、観客へのインタビューおよび質問紙による調査を実施し、現実体験の変容を調査した。また、研究者が観劇を通じて、その体験を質的に調査し、批評的に言語化した。二年目は、演劇の現実体験様式の結果を元に、心理療法場面に演劇的現実体験の方法を導入し、研究者が個々に夢分析や箱庭療法の実践を試み、相互フィードバックを繰り返しながら、クライアントの体験する現実の変容を事例の研究を通じて明らかにしていった。最終年度は、二つの領域において、インタビュー調査・質問調査・事例研究を展開し、それを学会発表と論文において世に問うた。

４．研究成果

まず秋田や前橋における演劇実践とそのフィードバックから出たが集積され鑑賞者の現実体験が分析された。結果として、文章表現や映像表現、そしてシンポジウムでの口頭表現を演劇的な手法で提示することによって、鑑賞者は情報を一元的に受動的に受け取ることから離れ、情報ではなく鑑賞者自身が関わっている主体的な現実であると理解し、ある種の出来事に自分自身が関与しながら、それを観察し理解するという意識性に変容していくことが明らかになった。

こうして演劇的な現実体験を通じて生じる事象は、カタルシス体験や仮想現実体験ではないことがあらためて確認されると同時に、演劇は私たちが日常的に体験していると感じている身近な現実をその本来の強度において再体験させるメディアであることが明らかになった。日常的な現実はすでにカテゴリー化された概念で把握され、出来事の本来の強度から切り離され加工されている。われわれの意識は、むしろ日常において現実を遠ざけ、舞台の上に乗せて眺める方法をアプリオリに身につけている。つまり、演劇的現実体験は一般的に考えられているのとは逆に現実を舞台から引きずり下ろしてわれわ

れの目の前に据える役割を果たしている。演劇は、思想や理論の提示ではなく、あくまでもわれわれ自身の現実を本来の強度に戻して体験させる現実体験であることがあきらかになった。

また、その現実体験様式は、心理臨床において神経症や人格障害を患っているクライアントが体験している様式と酷似していることも明らかになった。すなわちクライエントは、本人が意図していないままに現実をその本来の強度において体験せざるをえない心的状況に曝され、その局面においてやまいに直面しているのである。それは、演劇体験との比較で喩えていえば、演出家の導き手のない状態で現実体験が始まってしまい、始まりと終わりの見えない舞台に巻き込まれてしまった状態であるとも言える。

心理療法そのものでの現実変容体験についての研究も同時に進められていった。具体的には、てんかんの青年との心理療法過程を通じて、心理療法における変容とは何かという問題が検討された。いわゆる医学的にてんかんの大発作を除去できたとしても、てんかん気質は遷延することが多く、症状の除去で心理療法が完結するわけではない。つまりてんかんの心理療法における変容は症状の除去を問題にするのではない。また一方で心理療法的な変容は全く新たな人生を提供する変身でもない。てんかんの心理療法事例を検討する中で、課題は、今ある存在基盤をそのままに継続しながら、別の存在様式へとかすかな扉を開くことであることが明確になっていった。いままでとこれからの二つの様式が目に映ることのない臍帯によってむすばれ、存在がこれからの多様性に開かれていく。その「かすかな移行」が変容と呼ばれ得る。てんかん者である青年の姿とその夢と箱庭から、矛盾を孕みながらも豊かな心理療法的な結合状態が浮かび上がってくることが研究論文として示された。

このような研究の進展を受けて、心理療法と演劇の現実変容体験が次のように整理して考えられることとなった。すなわち、心理療法において必要とされることは、まずは本来の強度を持った現実体験にさらされるのではなく、その体験の筋道が発見され、体験の始演と終演が見いだされ、最終的にはその現実体験を通じて、意識と現実の捉え方そのものが変容していくことである。また逆に、演劇において必要とされるものは、現実を本来の強度において提示するだけではなく、心理療法的な治癒体験と酷似したものが起きることを承知した上で、クライエント同様に現実に曝されていく「病理化」のプロセスを歩み、そのうえで現実の変容へとたどり着くことである。

そして、演劇的現実体験と心理臨床的現実体験の調査研究によって最終的に本研究が明らかにしたものは、その変容体験そのものは、極めて「かすかな移行」であり、存在の根本的な変容や思考の根本的な発展などではないということである。カタルシス体験のような一瞬の高揚は、現実を大きく変更したように体験される。一方でその内実は発散的な作用にとどまる。しかし、ここで明らかになった変容体験は、そのような高揚は伴わず、何かが大きく変わったとの自意識も生み出さない。しかし、それでいてその体験を経ることによって、客観的にはその体験者の生活が変わり、現実を体験する様式が変わる。自己を苦しめる症状は消えはしないものの、もはや苦しい異物ではなく、その者自身の個性のように携えていけるものとなる。

それは現実と非現実が接触することによって生じてくる現実の多様化であるとも言える。その際の多様な現実はヴァーチャルで幻惑的なものではなく、むしろ一面的であった現実に分裂を生み出し、それでいてその分裂を病理的に絶対化することなく、むしろいくつもの現実が分離しながら結びあわされていくという複合的な現実の成立につながる。それは結合と分離の両面を持ち続けることである。これはC.G.ユングのいう「錬金術の vinculum（臍帯）」という心理療法の重要な概念にも近似してくる。錬金術の臍帯は、実際に存在するつながりではなく、媒介的な何かでもない。異質なものの結合と分離を結合しているものであり、結合と分離の同時性の表れである。それは私たちの言語記号にあるスラッシュに似て、二つの言葉をつなげながら分けるものである。二つのものから第三のものが生まれるような壮大な変容ではない。しかし、変容は生じ、多様性を迎え入れ、存在を基礎づけ、二つの現実が臍帯でつながりながら分かれているような変容がある。変容とはすなわち根本的な現実の変化ではなく、ある現実が別の現実へと接続していくことにより生じる存在の変容であり、現実の多様性が動き始める局面のことである。それが「かすかな移行」である。

このような「かすかな移行」体験が、変容体験の本質であることが、本研究から明らかになったといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３件）

①.猪股剛,「かすかな移行としての心理療法-ユング心理学から見た変容-」,箱庭療法学研究 Vol30-2, 2017 年(発行予定),査読有

②.川嵜克哲,「心理療法における『する』と『なる』- 中動態からみた箱庭療法と主体のあり方 -」,箱庭療法学研究 Vol27-3.105-121 頁,2015 年,査読有

③ .Yasuhiro Tanaka,“On the Nature of Neurosis: How can We See it from a Standpoint of Jung’s Psychology?” Journal of Psychology and Psychotherapy

Research, 2, 50-62. 2015,査読有

〔学会発表〕（計　3 件）
①.（国内学会発表）猪股剛「個と共同へのイニシエーション－ある 30 代女性の夢を通じた心理療法過程－」第 30 回日本箱庭療法学会、大阪、2016 年 10 月 16 日

②.（国際学会発表） Ann Casement, Pamela Power, Michael Whan, John Hoedl, Tsuyoshi Inomata, “Absolute Interiority: analogy of the fairytale of Rapunzel” XX International Congress of the International Association for Analytical Psychology, Kyoto, September.1st.2016

③.（国際学会発表）Tsuyoshi Inomata, "Self and Other: Is it an occultism, a philosophy or a psychology", XX International Congress of the International Association for Analytical Psychology, Kyoto, August. 29th. 2016

〔図書〕（計　3 件）
①.河合俊雄・田中康裕・畑中千紘・藤巻るり・古川真由美ほか 2 名,『発達の非定型化と心理療法』(河合俊雄・田中康裕編著),創元社,2016 年,122-143

②.今石みぎわ, 田中康裕, 岡部隆志, 川野里子,猪股剛,岩宮恵子,三浦佑之,『遠野物語遭遇と鎮魂』(河合俊雄・赤坂憲雄編)岩波書店,2014 年,55-80,135-164,227-238

③. 箭内匡,久保敏,村尾静二,宮坂敬造ほか 10 名,『映像人類学－人類学の新たな実践へ』、せりか書房,2014 年,56-75,246-247,273-274

６．研究組織
(1)研究代表者
猪股剛（INOMATA, Tsuyoshi）
帝塚山学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号：90361386

(2)研究分担者
田中康裕（TANAKA, Yasuhiro）
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：40338596

川嵜克哲（KAWASAKI, Yoshiaki）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：40243000

宮坂敬造（MIYASAKA, Keizou）
慶応義塾大学・文学部・名誉教授
研究者番号：40135645